

飛華落葉を觀じて悟るもの

白 土 わ か

最近でこそ余り聞かなくなったが、つい先頃までの仏教学者は、独覺または緣覺についての説明に、「十二因緣を觀じて悟るもの」といい、また「飛華落葉を觀じて悟るもの」とよく云ったものである。これらの説明を耳にすると、十二因緣を觀ずることと、飛華落葉を觀ずることとの、論理的な關係がはっきりとはしなかったし、また飛華落葉云々という、いかにも日本的な表現が、実は日本では平安初期以来云々され、用いられて、それが仏教者以外にも幅広く使われてきたというところを、改めて見直してみたいのである。

一
獨覺または緣覺と十二因緣との關係は、『法華經』序品に、

為_下求_ニ辟支_一者、説_ニ庖_{十二}因緣_法一

と、聲聞を求むる者の為には四諦の法門が、菩薩の為には六波羅蜜が、過去仏の日月燈明如来によって説かれるように、辟支仏の為には相應する法門として十二因緣が説かれることになっている。これは大乘仏教に於いて定着した辟支仏すなわち獨覺との關係である。そしてこれが説かれるのは『法華經』のみに限ったことではない。

一方、飛華落葉を觀ずることに関しては、いわゆる無師獨悟の性格が見られるが、それについては、平安初期の安然（生没年不詳。但し八四一・生年説あり）の『真言宗教時義』に見てみよう。同書卷二に、

獨覺人飛華落葉以証_ニ聖果_一（大正藏經七五、四〇八c）

とあって、獨覺は飛華落葉を見ることによって聖果を証するという。それは自悟である。さらにこの記述の前後

をみると、

小乗婆沙俱舍論等説。伊沙山有五百独覚。時有群猿。先見比丘園遶行道。彼猿字之以現威儀。時五百人見。彼悟道。又独覚人飛華落葉以証聖果。(中略)十住斷結經云(中略)仏滅度後像法已尽。經行樹下。割皮聞声即成仏道等云云。以一例諸一切六大。十界一切諸法隨成聖果。皆撰大日如來一切時説之中。何以故。大日如來一切法為自体故。凡有仏事皆撰大日所為之中。天台宗云。法身無説無示冥資一切即此義也。

とあり、飛華落葉の他に、伊沙山の五百独覚と猿の話と、仏滅後の像法の時に、樹下に経行して木を割る声を聞いて仏道を成じた話がある。何れも独覚に関するものなのであるが、独覚は無仏の時に直接教説によることなしに、現前の事象に触発されて悟るというのである。

伊沙山の独覚の話は、『大毘婆沙論』卷四十六に見られるが、そこには、

如五百仙人在伊師迦山中修道。本是声聞出無仏世。獨猴為現仏弟子相。彼皆学之証。独覚果無学不受外道相故。(大正藏經二七、二四一b)

と、無仏の世に、もと声聞の五百仙人が猿の仏弟子の相

を見て、独覚果を得たことになっている。

樹下に経行して木を割る声を聞いて仏道を成じたという話は、『十住斷結經』卷五に

仏去世久像法滅尽。宿緣衆生尽為所在心懷煩惱。周章経行詣一樹下。以右手指爪刮干樹皮。正值空処驢然有声心霍然瘡。便成無上正真之道。左右顧視不見翼從。隱形匿相不転法輪。如凡常人。人間分越。是謂亦不過智賢聖辟支之所修行非仏羅漢也。(大正藏經一〇一〇三。一〇〇四a)

とあるによつて、仏滅後像法の世に爪を以て樹皮をけずる音を聞き、霍然としてさとしたということ、そして他の為には説法しないということ、これが辟支仏であるというのである。

このような現前の事象によつてさとることについて『真言宗教義』は、密教的な解釈によつて、大日如來は一切法を以て自体を為すが故に、十界一切の諸法に於て聖果を成ずることができると解釈している。

さて、飛華落葉を以て聖果を証することについては、その出拠を『真言宗教時義』は明らかにしていないが、次の説明を見てみよう。

問。且如四時春生夏榮。秋熟冬蔵。是天地自然之

道也。地水性沈。風火性昇。亦陰陽造化之理也。然則因塵入眠以証聖果。可撰弘化。以弘說故。見華觀緣以成聖道。何撰弘化。以自悟故。是以論之業報十界六大等中誰為化主。誰能得道。今真言宗行者約一切法作內証觀。感応和合撰一切時。大目所化。其餘諸宗学徒一切俗人乃至六道不作此觀。聞風無利。見華無益。何撰大日一切時說所化之中。(大正藏經七五、四〇九^a)

と、まずこのように、飛華落葉を見て悟るということについて疑問を提示している。それは、春夏秋冬のいとなみといった自然の理や、陰陽造化の理といったことについて、それを対境としてしばらく惑に入り、それから聖果を証するということは仏の教化の中にも見られることである。しかし、華を見、縁を觀じて聖道を成ずることは、自悟であつて仏の教化には入らない。真言宗の行者は一切法に於て内証の觀を作すが、その余の宗の学徒はこれを作さない。風の音を聞くというのも、華を見るというのも、益なきことに過ぎないというわけである。經典の中に示されていない、このような風流事の如きことが、聖道とはかわりのないことだというのであろう。一応、尤ものことのようにである。そして、飛華落葉云々と

いうことが、經典に由来するものでないことも知られる。

この疑問提示に対する答は、

答、(中略) 是大日普門身。法界身。金剛界身。

故知飛華落葉割木列猿並は無非大日如来自然造化之功。(同)

と、大日如来の自然造化の功として、飛華落葉も、割木の声も、伊沙山の猿も、大日如来の中にあつて、聖道を成ずる契機となると述べている。そしてまた、

今見華見後得道是小乘独覚也。若割木聞声得道是菩薩独覚也。(同四〇九^b)

と、独覚の悟に、小乗と菩薩乗とがあることを認めている。華を見て而る後に悟るのは小乗であり、割木の声に直ちに悟るのは菩薩であるとするのは、独覚の悟に関する解釈として注目をひくが、これは天台教学的であり、また密教的である。

飛華落葉が經典に由来するものでないことは前に述べた通りであるが、それを考えるに先立つて、『大智度論』卷十八の記述を見てみたい。

問曰、若辟支仏道亦如是者。云何分別声聞辟支仏。答曰、道雖一種而用智有異。若諸仏不出仏法已滅。是人先世因縁故。独出智慧不從他聞。自

以智慧得道。如一國王出在園中遊戲。清朝

見林樹華菓蔚茂甚可愛樂。王食已而臥。王諸夫人
嫖女。皆共取華毀折林樹。王覺已見林毀壞而自
覺悟。一切世間無常變壞皆亦如是。思惟是已無
漏道心生斷諸結使得辟支仏道。具六神通即飛
到閑靜林間。如是等因緣先世福德願行果報。今世
見少因緣。成辟支仏道如是為異（大正藏經二五、
一九一ab）

と、辟支仏は先世の因縁によって無仏の世に独り得道する
ことがある。それは林樹華菓の繁茂していたのが、華
は取られ樹は毀たれたさまを見て、世間の無常を觀じ無
漏道心を生じ辟支仏果を得てゆくようなものだという。

この辟支仏は獨覺に対して因縁覺と名づけると『智度
論』には云っているが、それは先世の因縁と今世に少因
縁を見ることによって得道するのである。そして、それ
は眼前の事象によって世間の無常を觀することから始ま
るという。これは、直ちに飛華落葉には結びつかないが、
日本でしばしば云われる飛華落葉と無常との關係は、こ
こにすでに現われていることが注目される。

『智度論』の記述とともに『大乘義章』卷十七の記事
もまた注意を払う必要がある。

藉現事縁而得道者皆称縁覺（大正藏經四四、七八九a）

というのは、眼前の事象によって得道するものを縁覺と
称することであって、外なる縁をかりることを意味する。
『大乘義章』は縁覺を、十二因縁を觀じて得道するもの
と、この眼前の事象を觀ずるものとの二種に分ける。

外なる縁を示す飛華落葉という表現は、安然の『真言
宗教時義』以前のどこにあるのか、目下判然としないが、
ただ、それは『智度論』の譬や『大乘義章』の文章の示
すところと関連はありそうである。しかし、飛華落葉と
いう表現は、眼前の無常をあらわすのにふさわしく、そ
の語感からもよく用いられるに至ったのであろう。

二

飛華落葉が、日本の文学等に現われているいくつかの
例をあげてみよう。藤原定家に仮託された歌論書『愚秘
抄』には、

飛花、落葉を見て、世の無常を悟り、はかなきなら
ひを夢になすらへん道心者などは、さるためしも侍
りなん。（日本歌学大系四、二九四頁）

と見られるが、これは歌をよむ心ばせについて、飛華落
葉を見て悟りゆく道心者の心を、そのあるべきさまと見

ているのである。

謡曲「拍崎」には、

暫らく世間の幻相を観するに、飛花落葉の風の前に
は、有為の転変を悟り……（岩波、日本古典文学大系『謡
曲』上、一九二頁）

とある。同じく「関寺小町」には、

逢坂の山風の、是生滅法の、理をも得ばこそ、飛花
落葉の折々は……（同『謡曲』下、二九三頁）

と見られるように、中世の謡曲の中には、有為転変を悟
るよすがとしての飛華落葉が、しばしば用いられる。

また中世の芸術論の『専応口伝』には、

飛華落葉の風の前にかゝるさとり種のをうる事をや
侍らん。（岩波、日本思想大系『古代中世芸術論』四五二頁）

といっている。『専応口伝』は十六世紀前半に活躍した
池坊専応の書であるが、ここにも飛華落葉が花道の根底
にかかわることが知られる。この書にはまた、

電雲は桃花を見、山谷は木犀をきき、みな一花の上
にして開悟の益を得しぞかし。（同、四五〇頁）

というが、中世の芸道と仏教との関係を知ることができ
る。そしてそれは飛花落葉的な、あるいは縁覚的な悟り
への方向なのである。

更に、江戸末期の井伊直弼は『茶湯一会集』に、

花は専ら有為転変飛華落葉を観することなれば、あ
ながち珍花を賞するにあらず。

というのである。井伊直弼の茶道論は中世以来の伝統を
受けるものではあろうが、それは「一会」という禪の方
式を受け、また花は有為転変の飛花落葉を観するのだと
いうに至っては、日本人の中に根を下ろした仏教をその
まま見る思いがする。

三

辟支仏について、十二因縁を観するというような、仏
教の教法そのものに於て、理と内面的な省察そのものに
於てする観法に対し、外縁、つまり現前の事象に導かれ
て真実を観するという、両様のあり方があったわけであ
る。この後者はとくに飛華落葉を観するという表現によ
って、しばしば日本仏教もしくは日本文化の中に現われ
てくるが、これは日本仏教というもののひとつの性格を
示していると云えるであらう。

それは論理よりは具象に於て観するやり方であり、飛
華落葉という無常を示すにふさわしい表現は、日本人の
好むところでもあったということである。そして、飛華

落葉を觀じて悟ろうとし、また、自然のいとなみの中で瞬間的に直覺的に物の真隨に迫ろうとする。それは日本人のやり方でもある。それは仏教では独覺・緣覺の自悟であり、他の為には説法せぬそのやり方に通ずるものがある。それには、平安初期以前から始まる日本人の風流にもつながるものがある。

その風流とは單なるあそびではなく、美意識を通して真実に迫ろうとする人々があつたことを考へてみる要があろう。『日本靈異記』の中の「女人、風声みさごの行わざを好み、仙草を食ひて、現身に天に飛ぶ縁」は、道教の影響を受けた風流である。平安初期の源融は嵯峨に栖霞觀を設けて風流を事とした。何れも道教の流れを受け、それが日本人の風流となつたが、日本仏教の中にもそれが入つてきていたと思われるのである。安然是とくに飛華落葉を云々したが、飛華とか落葉とかは、当時の漢詩集の中でも好んで用いられた詩題であつた。

そして、日本の文学や芸術論の中には、前にもあげた通り、飛花落葉が出るが多いが、とくに多い中世には、隱者として仏教者があつたことが見逃せない。鴨長明しかり。また西行としての中にあると見られるであらう。それは、中世にのみ始まるのでなく、古くからの系

譜の中から出た、日本的風流の仏教解釈であつたと見られよう。

また、中世の人々が、飛華、落葉ではなく、飛花、落葉といひかえて用いているのも、いよいよ眼前の事象なのである。

そのとき、悟りの内容は何なのかは、改めて問ひ直さるべき問題である。それについて一言ふれるならば、安然的『真言宗教時義』が示しているように、法界の一切諸法は、大日如來の法身説法に他ならぬとする密教的な解釈が、ゆきわたつていたものと思われるし、同時にまた、天台の諸法実相論の影響があつたと考えられるのである。すなわち、一切諸法はその現象のままに眞実であるという考え方である。その現象に直參することによつて、すなわち止觀の実践によつて、法の眞実相に至ろうとしたのである。これらの問題については、別に稿を改めなければならない。

註

- ① 乙本は天台宗叢書本。なお皮の字は木の方がよいと思われる。